

氏 名	井 野 瀬 久 美 恵
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 474 号
学位授与の日付	平 成 17 年 1 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	植 民 地 経 験 の ゆ く え ——アリス・グリーン・のサロンと世紀転換期の大英帝国——

論文調査委員 (主 査) 教 授 谷 川 稔 教 授 服 部 良 久 教 授 南 川 高 志 助 教 授 小 山 哲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀末から20世紀初頭にかけて大英帝国に生きた二人の女性の「植民地経験」を分析することによって、従来の大英帝国史研究のあり方に再考をうながそうとするものである。論者は、昨今の国際情勢から「帝国」の再検討が隆盛をきわめるなかで、大英帝国史研究の多くが「帝国だった過去」をもっぱらポジティブにとらえ、「植民地ノスタルジー」の再生産に終始しがちな状況に疑問を呈するところから論を起している。

この「植民地郷愁」に回収されない帝国史をめざす論者が注目するのは、西アフリカを単身旅したことで知られる「レディ・トラヴェラー」メアリ・キングズリ（1862～1900年）と、ロンドン有数のサロンの主人にしてアイルランド史の著述家でもあったアリス・グリーン（1847～1929年）という二人の女性である。メアリ・キングズリをサロンのゲストに迎えたアリス・グリーンは、メアリの植民地認識に触発され、南ア戦争下のボーア人捕虜収容所で不慮の死を遂げた彼女を追体験する旅に出る。メアリ顕彰のために「アフリカ協会」を設立するとともに、この「南ア経験」とおして、アリスは自らの帝国認識、植民地認識、さらにはアイルランド認識の転回を経験する。論者は、彼女たちのこうした「植民地経験」の交流を具体的に検証することによって、帝国における中心（＝イギリス）と周縁（＝植民地）の関係性を再考し、19世紀末から20世紀初頭にかけての大英帝国とはどのような空間であったのかを明らかにしようと試みる。

第一章では、メアリ・キングズリからアリス・グリーンへと継承された植民地経験を考えることがなぜ世紀転換期の帝国を再考することになるのか、その道筋を明らかにしている。最初に、現在「もうひとつの世紀転換期」にあるイギリスが直面しているアイデンティティ・クライシスが指摘され、それと連動した帝国史研究の諸問題が整理される。すなわち、地図上の大英帝国の消滅とEUの拡大、そしてイギリス内部でもスコットランド、ウェールズ議会の設置にみられるような地方分権化の進行、という現実が「イギリス国民像」の再構築を要請していること。さらにこのアイデンティティ論争の高まりが、「帝国であった過去」を「恵み深き帝国」として肯定的に捉える傾向を助長し、ポストコロニアル研究やジェンダー研究からの異議申し立てにもかかわらず、依然として帝国支配擁護の植民地ノスタルジーが再生産されつづけていること。こうした内外の帝国史研究の現状を打開するには、従来の帝国史研究のベクトルを逆転させ、本国が植民地になしたことだけではなく、植民地での活動や経験がどのように本国に持ち帰られ、それが本国の何をどのように変えたかに注目する必要があると説く。

たとえば、論者は、イングランド史家未亡人アリスが、アングロ・アイリッシュとしての自己に目覚めアイルランド国民史の叙述に向かう、という本論の基本的モチーフを、メアリ・キングズリの「植民地経験」がアリスとそのサロンとのあいだに取り結んだ交流にもとめようと試みる。すなわち、彼女たちの経験の往還と植民地認識の変容のプロセスを中心に、帝国文化史を書き換えようとする本論文の意図がはじめに明確にされている。

第二章では、アリスがイングランド史家の夫J・R・グリーン死去後、1880年代半ばに主宰するようになったサロンとその常連たちを克明に分析している。論者がこのケンジントン・スクエア14番地の第一次サロンに特に注目するのは、これまでに一冊だけ存在するアリスの伝記（マクドウェル著、1967年刊）では、ほとんど重視されてこなかったからである。こ

の伝記執筆に必要な資料のいっさいを提供したのは彼女の甥であった。彼が記憶する「叔母の物語」では、アリスはアイルランド史家であり、転居先のグロヴナー・ロード36番地の第二次サロンに、アングロ・アイリッシュのナショナリストを集めた人物とされている。

論者はこの後期の政治活動に偏したアリス・グリーン像を脱構築するために、甥の記憶にはないもうひとつのサロンを重視した。夫が亡くなった1883年から20年余りを暮らしたケンジントン・スクエアのサロンでは、1890年ごろから自由党の若手議員たちが集い、ポスト・グラッドストン、ポスト・レセフェールの政策を模索し、万年野党に甘んじていた党再編の糸口を見いだすべく、議論を重ねていたのである。

ほぼ同時期に常連となったフェビアン協会のベアトリス・ウェップの日記によれば、1890年代半ばごろからアリスと彼女のサロンは微妙に変化していったと思われる。変化は、彼女の著作活動に明らかであった。二冊のイングランド史を出版した後、10年余りにわたって単著が途切れ、その後、『アイルランドの形成と解体』（1908年）を皮切りに、アイルランド史関係の著作が続くようになる。言い換えれば、単著公刊の空白期、1895年から1904年頃までの10年ほどの間に、彼女の歴史認識が変化したのである。この変化の時期、アリスの前に立ち現れたのが、メアリ・キングズリと彼女のアフリカ経験であり、これこそが決定的なインパクトを与えたものとみなされる。

第三章では、アリスにインスピレーションをもたらしたメアリ・キングズリの生い立ちとその西アフリカの旅が検討される。メアリが西アフリカの風景や人びとをどのように語っているのかを旅のルートを追って分析するとともに、そのアフリカ経験にもとづく帝国観と文明観をアリス・グリーンがどのように理解したかを同時代の文献をもとに克明にたどっていく。メアリが「イギリス＝文明」対「アフリカ＝野蛮」とみる当時のステロタイプを否定し、ヨーロッパの「物質文明」がアフリカの「精神文化」を破壊している現実を鋭く批判したことにアリスはおおいに感銘を受けたことが示される。さらには手紙の分析を通じて、メアリ・キングズリが西アフリカの現地知識人に与えた影響、ならびに彼女が彼らとのあいだに知と交易のネットワークを構築しようとしていた事実が明らかにされる。このメアリ・キングズリのアフリカ経験が、アリス・グリーンに、知識や情報の交換を通じてイギリスとアフリカの相互理解が可能であることを確信させたことを論者はとくに重視している。

第四章以下では、このメアリ・キングズリの「植民地経験のゆくえ」がアリス・グリーンの活動のなかに具体的にフォローされる。前章で重視したメアリ・キングズリの確信—イギリスとアフリカの相互理解の可能性—に「かたち」を与えようとした試み、それが、アリス・グリーンの自宅サロンから立ち上がってくるアフリカ協会であった。まず第四章では、キングズリ追悼のプロジェクトであるアフリカ協会の設立、ならびに同協会のその後の変質を追跡している。アフリカ協会がメアリの植民地経験をどのように継承するものであったかを、季刊誌や議事録などを中心に分析するとともに、やがて同協会がアリス・グリーンのサロンから距離を取り、メアリとアリスの記憶を風化させていくなかで、どのような質的变化を遂げたかについても、アフリカ理解をめぐる協会内部の対立から考察している。端的に言えば、協会はしだいに植民地行政官などのディナー・クラブ化していったのである。

第五章では、アリス・グリーンの「南アフリカ戦争経験」を具体的に分析しながら、二人の女性にとって南アフリカ戦争とは何だったのかを考察している。メアリ・キングズリが戦時下の南アフリカで、ボーア人捕虜（オランダ系入植者）を看護中、腸チフスに感染して亡くなったとの報がロンドンに伝えられると、ジャーナリストのフローラ・ショウは、『タイムズ』紙に寄稿し「帝国の責務に殉じた愛国者」と彼女を讃えた。これにたいしてアリス・グリーンは、メアリの真意を曲げるものとみなし、南アでの「彼女の生と死の意味」をじかに確認するため、セント・ヘレナ島の捕虜収容所に赴く。

民間人として唯一立ち入りを許されたアリス・グリーンは、約1ヶ月あまり外国人義勇兵を含む戦争捕虜の証言を収集し、300頁を超える日誌として記録した。そこには、捕虜たちの戦争観、帝国への反感、収容所への不満、戦後の展望などが克明に記されていた。この聞き取り調査の結果、アリス・グリーンは捕虜の待遇改善を訴え、収容所を、「ボーア人が初めてイギリスを経験する場」、「愛すべき帝国を見せるための場」として改善することを陸軍省と植民地省に提案したことも明らかにされる。この点にかんしては、論者は、女性捕虜や現地黒人捕虜への視点が希薄なこととあわせて、アリスの「限界」をも指摘している。

だが、同時にアリスは、ボーア人のあいだに「国民意識」が育まれつつあること、南ア戦争に「自治をもとめる民族の戦

争」という側面がみられることを認識するにいたる。さらにイギリス軍、ボーア軍双方にアイルランド人が従軍し、親ボーア感情を共有しながら相対峙する、この構図を知ったアリスは日誌にこう書いている。「南アフリカはアイルランドと同じである。」こうして南アフリカ戦争の経験は、アングロ・アイリッシュであるアリス・グリーンが自らのアイリッシュ・アイデンティティを直視せざるをえない地平に導いたのである。

第六章では、アイリッシュ・ナショナリズムに目覚めたアリスのアイルランド史叙述が検討される。アリスは、メアリ・キングズリーのアフリカ経験から学んだ、「アフリカ人の個性」「アフリカン・ナショナリティ」、物質文明と精神文化、国民形成における文化の統合力、部族制度への見直し、といった考え方を援用して、アイルランド史のコンテクストに移し変えていく。メアリの、そしてアリス自らのアフリカ経験が歴史認識にも結実していく過程である。文字通り、メアリ・キングズリーの「植民地経験のゆくえ」のひとつは、アリス・グリーン「アイルランド国民の物語」に行き着いたのである。

当時のイングランド歴史学界では、アイルランドを野蛮視し、イングランドによる部族制度の破壊こそがより高次の政体をもった「国民の創造」を可能にしたとされていた。これにたいし、アイルランド史像の根本的書き換えをはかるアリスは、1908年『アイルランドの形成と解体』を上梓し、中世のアイルランドを文明豊かな世界として描きだした。つまり、イングランドによる征服以前に、アイルランドの国民的伝統は存在していたのであり、その文化的統合力によって「侵入する諸民族を融合し、国民に変えてしまう」のだという。そう解釈すれば、アリスの出自であるアングロ・アイリッシュもアイルランド国民に融合され、「アイリッシュ・ナショナリティ」の再生に寄与したのだと解されよう。予想通り、マンチェスター大学歴史学教授ロバート・ダンロップから、きわめて恣意的な解釈だとの酷評が寄せられ、激しい論争が展開された。彼への反論として書かれた『アイリッシュ・ナショナリティ』（1911年）には、「ひとつの国民」に賭ける彼女の強烈なこだわりが見て取れるという。

「むすびにかえて」では、アリスのサロンの変貌と「アイルランド国民の物語」のゆくえが検証される。グロヴナー・ロード36番地の第二次サロンでは、アフリカ関係者とアイルランド・ナショナリストのゲストが増えたことによって、政治色がより鮮明になり、政府の帝国政策批判の場に変容する。このサロンの変化自体がメアリ・キングズリーの植民地経験のゆくえである、ということもできる。しかし、そこには謎も残る。たとえば、アリスは「ひとつのアイルランド国民」に強いこだわりを見せながらも、この時点での完全独立を主張しなかった。そして彼女は、アイルランドを連合王国の枠内の自治ではなく、帝国の枠組みで考え直すこと、具体的にはアイルランドの自治領化を提起した。つまり、帝国の再編、大英帝国から英連邦への転換のなかで「ひとつのアイルランド」を構想したのである。しかし、アリスはまた、1913年から16年のイースター蜂起にかけて、ナショナリストの武装闘争に資金援助した「嫌疑」がかけられており、この「逸脱」を理解するには、処刑された元外交官ケイスメントらとの交流が分析されねばならない、言い換えれば、ケイスメントの「植民地経験のゆくえ」にも迫る必要がある、と指摘される。

一九一〇年代のアイルランドにおいては、「二つの国民」が顕在化し、アリスの願望が裏切られつつあった。すなわち、アイルランド問題がイギリスの政治におけるキャスティングボードを握っていた当時、アリス・グリーンが重ねた試行錯誤とその意味を問い直すには、アリスのサロンが危機に陥った第一次世界大戦中、帝国のみならず、アメリカ、そしてヨーロッパとの関係を含めた再検討が不可欠であること、ひいてはアリス自身の「植民地経験の最終的なゆくえ」の解明を今後の課題として、論者は筆を擱いている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて大英帝国に生きた二人の女性の「植民地経験の物語」を学際的な視角から分析することによって、大英帝国史研究に一石を投じようとした意欲作である。論者独特の嗅覚による「読み解き」が冴えわたった刺激的な作品であり、質量ともに水準を越えた「労作」であることを最初に確認しておきたい。

論者は、まず、昨今の国際情勢から「帝国」の再検討が隆盛をきわめるなかで、大英帝国史研究の多くが「帝国だった過去」をもっぱらポジティブにとらえ、今なお「恵み深き帝国」という植民地ノスタルジーの再生産に終始しがちな呪縛から解き放たれる必要性を説く。この植民地郷愁に回収されない帝国史を模索するうえで、論者が着目したのは、西アフリカを単身旅したことで知られる「レディ・トラヴェラー」メアリ・キングズリー（1862～1900年）と、ロンドン有数のサロンの主

人にして後半生はアイルランド史家でもあったアリス・グリーン（1847～1929年）という二人の女性である。メアリをサロンのゲストに迎えたアリスは、彼女の〈文明／野蛮〉の二項対立をのりこえた植民地論・アフリカ文化認識に感銘を受ける。南ア戦争下のボーア人捕虜収容所での看護中に倒れたメアリの訃報に、アリス・グリーンは自ら現地に赴き、彼女の死を検証する旅に出る。この追体験をとおして、アングロ・アイリッシュ出自のアリスは、自らの植民地認識、帝国認識、アイルランド認識の転回を経験する。「南アフリカはアイルランドと同じである」との実感から、アイリッシュ・アイデンティティに覚醒したアリスのサロンは、帰国後メア리를顕彰したアフリカ協会を立ち上げるとともに、アフリカ関係者とアイルランド・ナショナリストの拠点となっていく。アリス自身も、イングランド史の叙述からアイルランド国民史の書き換えにシフトしつつ、連合王国の枠を脱した、英連邦下のアイルランド自治領化案を提起するに至ったという。この二人の女性の「植民地経験のゆくえ」を追跡し、イングランド、アフリカ、アイルランドを結ぶトライアングルから世紀転換期の大英帝国の空間を学際的に読み解こう、というのが本論文の基本戦略である。

このスケールの大きな探求を可能にしているのは、論者がこれまで精力的に、英文学、人類学、歴史地理学などとの越境的・国際的対話につとめてきたフットワークと独特の感性であるが、それにもまして、この構想に説得力と生彩を与えているのは、膨大な一次史料の渉猟とその「読み解き」のプロセスである。アイルランド国立文書館の「アリス・グリーン文書」に収められた大量の手紙、日記、捕虜収容所での聞き取り調査日誌などの手稿史料を紐解き、丹念に読み解いていく、その「臨場感」は知的スリルに満ちており、「同業者の嫉妬を誘う」域に達している。カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアルな視点をもふまえながら、抽象的・類型的な帝国批判論に終わることなく、議論が徹底してアーカイヴァルな作業に裏打ちされている点は特筆されて良い。

論者の問題提起は多岐にわたっているが、ここでは、さしあたりつぎの3点を、本論文が開示しえた貢献として指摘しておきたい。

（1）まずは、帝国史研究に「女たちの物語」を導入したジェンダー研究の視点である。従来のイギリス帝国史のほとんどが「帝国」をつくった「男たちの物語」であり、女性が登場したとしても、せいぜい植民地行政官の妻たちが極端な人種差別主義者（白人の奥方）か、「母性帝国主義者」として描かれるにとどまってきた。論者は、もっぱら白人男性によって語られてきた「恵み深き帝国」を、卓越した二人の女性の植民地経験から検証し、こうしたステロタイプの打破に成功している。（ちなみに、本論文は、東京女子大・女性学研究所から「女性史・青山なを賞」を贈られている。）

（2）それ以上に重要なのは、彼女たちの植民地経験のなかに、帝国における「中心」と「周縁」の関係性を検証し直したことである。すなわち論者は「植民地経験」をたどる際にも、「本国から植民地へ」ではなく「植民地から本国へ」というヴェクトルを重視する。いいかえれば、アリス・グリーンのサロンを基点とした知的ネットワークは、中心（イングランド）と周縁（海外植民地アフリカ、国内植民地アイルランド）の双方向に開かれており、この「重層的な帝国空間を往還する」という捉え方は、新鮮かつ有効に作用している。この広域ネットワークとその双方向性という視点こそが、アフリカとイギリスとの相互理解の可能性を強調したメアリ・キングズリーのアフリカ経験と、アリスのアイルランド国民文化論をつなぐものであり、「個人の物語」に普遍的な広がりを与え、帝国批判の多様な可能性を展望させている。たとえば、アリスのアイルランド自治領化論は、カナダの位置を連想しつつ、支配―被支配の「タテの関係」を、独自の文化を持つ国民と国民との「ヨコの関係（双方向的ネットワーク）」へ転換しようというものであった。これは帝国を否定した独立論ではなく、英連邦への再編を構想するものであり、今日からみれば微温的であるが、当時の文脈では一定の「帝国批判」になりえたと言者は見ている。

（3）第三点は、アングロ・アイリッシュのアリス・グリーンがメアリのアフリカ経験をとおしてアイリッシュ・アイデンティティを獲得したとする解釈の独自性である。従来のアリス像は、彼女の甥の記憶と資料にもとづいた伝記のように、もっぱらアイルランド・ナショナリストの文脈で語られていた。これにたいしてアリスの第一次サロンと植民地経験に着目する論者の方法は、彼女をアイルランド史、あるいはイングランド―アイルランド関係から切り離し、イギリス（連合王国）―アフリカ―アイルランドという三角形のなかに置き直すことによって、より陰影に富んだアリス像を描き出すのに成功している。

もとより、これらの論点になんら問題がないわけではない。反帝国主義の立場にたてばメアリの「西アフリカ間接統治

論」とアリスの「アイルランド自治領論」の限界を指摘することはたやすい。とりわけアリスの南ア認識はボーア人男性（入植白人）レヴェルにとどまっており、エミリ・ホブハウスなどと比べてジェンダー論的にも物足りない。また「ひとつのアイルランド国民」というアリスの強いこだわりにもかかわらず、1910年代には、「アングロ・アイリッシュ・ユニオニスト」と「ゲリック（カトリック）・アイリッシュ・ナショナリスト」という「二つのアイルランド」の対立が顕在化しており、その渦中でアリス自身、1913年から16年のイースター蜂起にかけて、ナショナリストの武装闘争に肩入れしていた事実はどう解釈すべきか、蜂起で処刑されたケースメントとの関係を含め、ダブリンに移ってからのアリス・グリーンの「植民地経験の最終的なゆくえ」の解明が望まれる。

とはいえ、こうした疑問のほとんどは論者自身も認識し、今後克服すべき課題とされており、本論文が帝国の文化史研究に貴重な一石を投じた力作であるという評価をいささかも貶めるものではない。支配の論理の後付けに終始する「植民地郷愁」的研究にたいして、スケールの大きな人的ネットワークの文化史を丹念に描いて批判しきった、論者の力業は高く評価されてよい。本論文は今後、イギリス帝国史研究者のみならず、ひろく近現代の文化社会史研究を志すものにとって必読の文献となるはずである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年11月22日、調査委員4名が論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。